

公益財団法人



すみりんニュース No.41

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会
 ■編集発行人 理事長 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21
 TEL06-6674-3732 FAX06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

この号の内容

1. 「人権のまちづくりを考える」すみよし

連続講座の報告 (1) ~ (15)

2. 「公益財団からのお知らせ」

(15) ~ (16)

■ 「人権のまちづくりを考える」すみよし 連続講座の報告

人権のまちづくりとしきじ —日本と世界の動きをふまえて

2015年1月31日(土)午後10時から12時まで、市民交流センターすみよし北において「人権のまちづくりとしきじ—日本と世界の動きをふまえて」をテーマに、『人権のまちづくりを考える』すみよし連続講座が開催されました。講師は、大阪教育大学教員の森実さんでパワーポイントを使った90分程度の報告の後、参加者から質問や意見が出され、今後の住吉における人権のまちづくりに役立つものとなりました。

以下に、当日の森さんの報告と質疑応答を掲載します。なお、当日の参加者は18名でした。
 (文責：事務局)

司会 (友永健吾)

昨年の4月から2カ月に一度、「人権のまちづくり連続講座」として、学習を深めてきました。今日は「人権のまちづくりとしきじ—日本と世界の動きをふまえて」と題して、大阪教育大学の森実さんにお越しいただき、学習を深めていきたいと思っています。

学習会を始めるに先立って、連続講座実行委員会の友永健三代表から挨拶を受けたいと思います。

主宰者代表挨拶 (友永健三)

今回の「人権のまちづくり連続講座」は識字をテーマにしています。

「住吉と識字」については、二つの思いがあります。一つはフィールドワークです。住吉では年間10回から15回、フィールドワークを受け入れていますが、いまの住吉の状態を見てもわかってもらえないところがあります。以前はどのような状態で、どんな苦勞をして、いまのようになってきたのか、ということを知ってもらわないといけないので、いろいろ苦勞しています。住田利雄さんが撮って

いた昔の写真を見てもらったりしていますが、写真というのは平面的で、どんな生活なのかというのが、なかなかわかりにくい。しかし、識字の作品は、重みがあります。吉村美代子さんの文章を使わせてもらったりしていますが、生活の実態がどうだったか、学校でどんな目にあっただかということがよくわかります。いまで言えば児童労働ですが、監督官が来たときに隠れたとか、あるいは、家族がばらばらになって、妹さんに会いに行ったりする、そういう生活の苦勞を書いておられて、差別の実態がよくわかります。

もう一つは石川一雄さんのことです。つい最近、全証拠がやっと出ました。279点あって、そのうち44点が新たな証拠で、その中には逮捕直後に石川さんが書いたハガキがふくまれています。石川さんは犯人ではないという確信を私が持ったのは、逮捕された直後に書かされた書類に「石川一夫」と署名をしています。自分の名前「一雄」の「雄」は画数が多くて書けないので、「一夫」と書いています。自分の名前を書けないほど、書く力を奪われていたわけです。

私はそれを見て、石川さんはやっていないと確信したわけですが、残念ながら、優等生が多い裁判官にはわからない。読み書きができない人がいるということ自体がわからないので、ああいう裁判になってしまった。

現在、石川さんはいろんなところに、訴えの文章を送っておられて、ついこの間も私の連れ合いのところへ石川さんの書類が送られてきましたが、すばらしい短歌を詠んでおられます。漢字も辞書で調べないといけないような難しい漢字を使っていますが、石川さんは獄中で辞書を引ながら字を覚えていった。だから、いろんな意味で、石川さんの生い立ちは、識字というものがもっている意味を、われわれに教えてくれていると思います。そういった点で、今日のテーマは重要なテーマだと思います。

森実さんは学生時代から、私は知っています。困難な時にいつも頼んで、助けてもらっているんですが、今日も住吉まで来ていただいて、感謝申し上げます。いっしょに学んでいきたいと思います。

司会 森さんは、1955年生まれ。1984年から大阪教育大学に勤務され、1985年から2005年頃まで、八尾市西郡地区の識字学級に通われました。2005年頃から高砂日本語教室（中国帰国者のための日本語教室）にかかわり、1990年頃から識字に関連して国際的な動きにかかわり始められました。フランス、タイ、インドネシア、エジプト、韓国など世界各地の識字学級を見学する機会を得て、2010年から2012年、JICAの研修プログラム、グループ研修、成人識字の講師をされていました。現在、識字・日本語連絡会の代表幹事をされています。

森さんから1時間程度お話しいただき、休憩のあと、みなさんとの意見交換をしていきたいと思います。それでは森さん、お願いいたします。

「人権のまちづくりとしきじー日本と世界の動きをふまえて」

森 実

(1) はじめに

石川一雄さんの話がありましたが、私が大



学に入った 1974 年は、9・26 の 11 万人集会（狭山控訴審判決直前の中央総決起集会）の年です。私は真面目な活動家ではなかったのですが、「人民列車」というのに乗って東京に行きました。デモをしていますが、先頭も最後尾もわからないというデモで、集会もどこが舞台なのかもわからないという、非常に大きい集会だったという記憶があります。

部落解放運動にかかわり始めた最初が狭山でした。私の場合は、石川さんは無罪だと思ったのは、判決文を読んだときでした。判決文は、「こういうことも考えられる」という文章がいっぱいあって、こんな判決文しか書けない判決はあかん、というのが最初でした。最近では、「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」という映画があります。これはまた全然違う角度から、石川さんがやったのではないと思わせてくれます。あの映画を見ると、この人は犯人ではないと思わせるなにかがあると思いました。八尾で上映したとき、映画が終わったあとに石川さんが出てきて話をしてくれましたが、映画の中と同じ、信頼できる誠実な人だということを感じました。

a 識字とのあい

いまから映像を見ていただきます。ここ 5 年間ぐらいの間、チームで識字の全国調査をやっていましたが、そのなかでインタビューをして、各地の識字で学んでいる人のことばなどを集めたものや、それ以外の場所で聞いたことばなど、識字にかかわっている人たちから出てきたことばを並べた映像です。

（スライドショー上映）

これは、奈良で経験交流会をやったときに、生徒さんの前で上映しました。学んでいる人に見てもらったのはそれが最初で、「とってもいい」と言ってくれたので、それからあちこちで映させてもらっています。

識字というのは、差別の生き証人という面、なぜ読み書きを学べなかったのかというなか

に差別が集約的に表れているという面が一方ではありますが、もう一方で、識字は部落解放の生き証人という面、綴っていくことを通して、人生が開けていくという面があると思っています。それがよくわかるスライドショー（映像とことば）だと思います。

b しきじ・識自・識字＝リテラシー

今日の「人権のまちづくりとしきじ」というタイトルですが、「まちづくり」と「しきじ」をひらがなにしています。それには意味があります。

「しきじ・識自・識字＝リテラシー」ということを説明しますと、先ほどのスライドショーのようなことばがいっぱい出てくるような調査をするなかで、「識字」という文字が、私たちが思っていることにぴったりなんだろうか、と思いはじめました。「字を識る」ということで「識字」と書いているのですが、そこで一番大事にしているのは、「字を識る」と同じぐらい、あるいはそれ以上に、自分がホッとできて、そこで自分のいろんなことを出せて、他の人とつながることができ、外で生きていく元気をもらえる、そういうことではないかということです。すると、「字を識る」の「識字」ではぴったりこない面がある。

また、若い子からすると「あれ（識字教室）はおばあちゃんが行くところや。ぼくらとちがう」という感じになってしまうか、若い子がなかなか来てくれない。いまでも、「高校は行ったけれども、読み書きが十分できない、計算が十分できない」という子がけっこういます。しかし、そういう子らが、「識字はぼくらにはあわない」と思ってしまう場合があるのではないか。

それではもったいないということで、「しきじ」の「じ」を「自分」の「自」、「自由」の「自」で、「識自」と書けば、「自分を識る」「自由を識る」というようにひろげられないか。あるいは「地球」や「地域」の「地」と

いう字にしても「しきじ」と読めるので、「地球を識る」「地域を識る」ことも「しきじ」だということになって、それならひらがなの「しきじ」にしよう、ひらがなにしたら、いろんな意味が入るのでいいのでは、ということになりました。

長い間「識字」にかかわっている人は、「識字」ということばそのものは捨てたくない、けれども、「字を識る」だけではないということを知ってほしい、それならひらがなの「しきじ」にするほうがいいのではないか。そういうことでときに応じて「しきじ」というひらがなの書き方を使うようになりました。

(2) 部落解放運動の原点としてのしきじ

a 学習者やかかわっている人のことばから

識字経験交流集会などで解放運動の役員が来たときに必ず言われるのが「識字は部落解放運動の原点です」という言い方です。では「原点」とはどういう意味なのか。次の三つぐらいの意味があると思います。

一つ目は「識字運動を入口として運動へ」ということです。とくにかつての女性部の役員の方たちが、「私にとって運動に入ったきっかけは識字やった」とよく言われました。そんなふうに「運動の入り口」という内容で、「解放運動の原点」という言葉に込められた意味の一つがあります。

二つ目は、「識字運動は自力自闘」という意味です。1970年代に入って同和対策事業が本格的に始まったときに、部落解放運動は「物取り主義」と批判された時期がありました。しかし、識字はそうではない。文字は、自分でがんばって獲得しなければならないし、そうでなければ識字は成り立たない。水平社宣言に言う「吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である」というまさにそのものです。その意味で、部落解放運動とは何かということが一番よく表しているのが識字

運動ではないか、ということです。

三つ目は、「識字運動は、これからの運動の手がかりを示しているのではないか」ということです。これからは新しい時代の運動になっていきますが、そのときに識字は解放運動の一つの模範、モデル、手がかりになるということです。部落内と部落外とのつながりということでも、各地の識字はどんどんそうなっています。部落の中で大事にしてきたことが、部落の外の人たちにも共有されている。そういうことが各地にあります。まちづくりの運動も同じことを課題としているので、そういう意味があると思います。

(3) いまどきのしきじ運動のなりたち

a ちかごろの部落の識字学級の性格

ここは、簡単に述べます。最近の識字運動に関わっている学習者の人たちは、「識字は解放運動の原点」というだけではなく、次のような言い方で識字の意義を語ります。

一つは、識字学級は「憩いの場」だということです。「ここへ来たらホッとできる」ということ。それがなければ識字ではないみたいな感じです。わたしが関わってきた八尾の西郡の生徒さんは、よくそう言っていました。

二つ目は「安心剤」。これはどういうことかと言うと、生徒さんは、「昔は字がこわかったけど、最近は違う。わからん字を見つけたら、手のひらに書いたりして、(識字がある)木曜日の晩に先生に聞いたらわかるから、もう知らない字を見てもこわくない」と言います。「識字があるおかげで1週間安心して過ごせる」と言うわけです。

三つ目は、「活動のベースキャンプ」です。「識字があれば、識字から他のいろんなところに出かけていける。識字以外の運動にも自信を持って出て行けるようになる」と言っていました。

ほかにもいろんな言い方ができるでしょうし、住吉は住吉で、いろんなことをしておら

れると思いますので、また聞かせていただけたらと思います。

文字の読み書きを学ぶということでは、部落の識字以外にもいろんな識字があります。私もいろんなところで識字学級を見せてもらっています。エジプトに研究集会で行ったとき、回路で開かれている識字学級の代表が来ていたので、カイロの識字学級を見せてもらいました。教室は女の人がほとんどでしたが、われわれが教室に入ると、頭にかぶるヘジャブをかぶろうとする。イスラム圏なので、男の人に髪の毛を見られたらあかん、ということ。しかし、それまでヘジャブを取っていたということは、この場所が安心できる場所だ、ということの表れだと思います。みんなが一生懸命、読み書きを勉強されていて、子どもたちはちょっと離れたところで遊んでいる。

学んでいる人たちからわれわれへの質問コーナーでは、おもしろい質問がいろいろありましたが、一つは、「この人たちはどうしてアラビア語を話さないのか」という質問です。学んでいる人からすると、コラーンはアラビア語で書かれていますから、ムスリムである彼女らからすると、だれでもアラビア語は話せるはずだと思っている。ところがわれわれがアラビア語を話せなかったのも、そんな質問が出ました。その代表の人は、「この人たちは地球の果てから来たから」と答えました。確かに、ヨーロッパやアメリカの地図では日本は端っこにあります。

タイの識字を見に行ったときは、100人ぐらいが一つの教室にいました。ほとんどが若い人で、なかにちらほらと年配の女性もおられました。そこで学んでいる若い人はミャンマーから仕事を求めてタイに来ている人です。タイに来て、身分証明書がなければ安定した仕事に就けない。識字で半年間学んだら、タイの中学校を卒業した資格がもらえるというので、そこで学んで証明書をもらって就職

ができる。英語で「エクイバレンシープログラム **equivalency program**」と言っていました。が、中学校に行かなくても、識字で学べば卒業資格がもらえるというもので、世界的にはこれがよくされているそうです。

b 識字運動としての強み

あちこちの識字学級を見ていて、部落の識字学級の強みは何かと考えてみました。第一は、「教育と運動との結合」です。運動があるから、自分が読み書きできなくなった背景を社会的に、差別との関連でとらえることができる。私はなぜ読み書きできなくなったのか、家が貧乏だったから、というだけではなく、おとうちゃん、おかあちゃんが、差別のなかで苦勞して生き抜いてくれた。だから私は育ったけれども、残念ながら学校へ行く余裕はなかった、というように。運動があるからわかりやすいところがある。堺の坂本ニシ子さんなどは、「字、知らんかて運動できる」と言う。運動のリーダーの人がそう言うってくれる。すごく励ましになります。そういう意味で運動と結びついている。

第二に「関係者の責任感」。1980年代に大阪市内の識字経験交流会や、大阪府内の識字経験交流会などに行くと、「学校の教師は教師の服を脱いで来い」とよく怒られました。「ネクタイをはずせ」とか、よく怒られたものですが、そんなふうに、どちらかと言えば、生徒が学ぶというのをもさることながら、識字に行く教師が学ぶという性格が強かった。行政の関係者も、社会教育主事の人が「すべての人が読み書きできるようにするのは行政の責任だ」と繰り返して言っていました。そんなふうに、関係者が責任感をもつなかで識字が取り組まれてきたことも特徴の一つです。恩恵ではなく行政の責任ということ。す。

第三に、「生い立ちと結んだ学習」ももう一つの特徴です。自分の生い立ちを綴ることは識字のなかでとても大切にされてきました。

他の国でもやってはいますが、部落の識字が一番だと思います。ブラジルの教育者でパウロ・フレイレという識字の神様みたいな人が、1989年に日本に来られました。国際識字年推進大阪連絡会の立ち上げの集会に来てくれたわけです。日之出（大阪市東淀川区）の識字学級の見学に来たとき、日之出の人が生い立ちを綴って読むのを聞いて、「ビューティフル・ディ」（すてきな日だ）と繰り返し言っておられたのを覚えています。フレイレも、生い立ちをとらえ直して、人間解放の識字ということをやっていたので、自分が言っていたことと同じことを日本でやっていることに感激したようです。

第四に、「明確な行政責任」。第二ともかかわりますが、行政がはっきりと自分たちの責任だと言っています。大阪府や大阪市は、1990年代に入ってから識字推進指針を策定しています。四條畷市では、行動計画まで創っている。この原動力の1つとなったのが、部落の識字運動です。

第五に、「交流の充実」。最近では識字の交流も以前ほどではなくなりましたが、部落の識字は他の地区との交流をしています。それぞれの教室が孤立して存在しているのではない。学んでいる人たちは、ときとして、読み書きできないなんて自分（たち）だけだと思込んでしまうのですが、交流があるので、自分たちだけではなく、仲間が各地にいることが実感としてわかる。

（4）まちづくりのなかの識字

a 「わがまちの識字学級」という思い

まちづくりというとき、「もの」「しくみ」「ひと」という三つの面が必ずあります。人権文化というときもそうです。国連の「人権教育の10年」のときに、「人権文化」と言っていました。文化というのは、「もの」「しくみ」「ひと」という三つの面かがあります。たとえば、相撲の場合、相撲の文化を表す「も

の」として土俵があり、「しくみ」の面では日本相撲協会という組織があって、そこでいろいろな約束事を決める。「ひと」は生き方や服装、所作などですね。たとえば相撲取りは、見れば相撲取りとわかります。鬘を結っているとか、体が大きく太っている、といった外見だけではありません。インタビューを聴いても、「相撲取りらしい話し方」をわたしたちは感じたりします。サーフィンでも、サーフィンボードがありサーファーがいて、しくみがあり、パドリング（サーフィンで、サーフボードの上に腹ばいになり、海面を進むために両腕でこぐこと）といったことばがあります。サーファーは色が黒くて、髪の毛を染めているとかいった特徴があります。みんながみんなというわけではないので、ステレオタイプになってしまってもいけないのですが、おおよそそのところそういうことを共有している。

そんなふうには文化には「もの」「しくみ」「ひと」という面があって、識字学級もこの三つを含んでいます。苦労の中を生き抜きそれを誇りにしている学級生という「ひと」、識字学級を運営している運営委員会という「しくみ」、識字教室にはいろんな「もの」が飾ってあります。そんなふうには「もの」「しくみ」「ひと」は、識字学級にもあって、まちづくりのなかでも生きると思っています。

私は、2010年から2012年の3年間、JICA（国際協力機構）の集団研修「成人識字」を担当しました。ウガンダやイエメン、パキスタン、イラク、ラオス、タイ、インドネシアなどの国の人たちが、タイで2週間、大阪で3週間の研修をしました。大阪では識字学級や夜間中学を見てもらって、自分たちの国に帰って計画を立てるときの参考にしてもらおうという研修でした。けっこうおもしろくて、いろいろ学ぶところがありました。さきほどタイの識字学級の話をしました。それもそのときに見せてもらったものです。

いろいろなおもしろいことがありました。一つだけ言いますと、日之出の識字に行ったときです。ラオスは貧しいらしくて、ラオスから来た人は「日本はいっぱいビルが建っている。ラオスではこんなことはできない」と言われていました。しかし、日之出で、「これはできる」と言われた。それは何かというと、地域の人が「自分たちの教室や」と思っている、ということ。一つの例として、日之出では、「教えに来ている先生」に、生徒がごはんをつくったりする。それぐらい地域の人が、「教えに来ている人」を大切にしている。この点について、ラオスの人は「自分たちでもできる」と言った。例えば、帰ったらすぐにでも、地域で教える「識字の先生」たちにごはんを食べてもらう、安心しておられる場所をつくってあげる、そういうことはできると言われた。

先ほど、部落の識字の特徴としていろいろ言いましたが、そのうちの 하나가、「わがまちの識字学級」という思いを持っているということです。これをその人は「オーナーシップ (Ownership)」と言っていました。「識字学級は自分たちのものだ」という意識を地域の人たちが持っている。

b 識字とまちづくり

識字というのは、「まちづくりの思想を体現する」ということがあると思います。先ほど「もの」「しくみ」「ひと」ということで言ったことですが、識字は、まちづくりで何を大切にするのかということをよく表していると思います。最近「インクルージョン」とか、「ユニバーサルデザイン」とか、すべての人が元気になれるまちづくりや集団づくりという意味合いで、いろんなことばが使われるようになってきました。でも、識字学級は、そんなことばが出てくる以前から、それをずっとやっていました。識字学級では能力主義は通らない。一番読み書きできない人が元気に

なれるにはどうしたらいいか、ということを中心に考えているからです。私も識字学級で運営委員会などをやっていた頃は、レジュメは絵で描きました。項目を短く書いて、その横に中身がわかるように絵を描く。例えば級外学習のときはバスの絵を描いたりしていました。

また、「まちづくりの主体を育む」ということがあります。識字学級で学んだ人たちは、そこで得たものをみんなに返す。

それから「地域を学び地域をつくる」。これは「しきじ」の「じ」を地域の「地」にするということになります。先ほど、吉村美代子さんの話もありましたが、識字学級の生い立ちを綴るということは、とりもなおさず地域を綴るということですから、地域を綴って、それを子どもたちに伝えていくということがやられてきました。そんな思想が全部まちづくりに生かせるのではないかと思います。

c 世界における識字とまちづくり

カンボジアでは、アンコールワットやアンコールトムなどの遺跡があるところに行っただけですが、ガイドさんに頼んで識字学級を見たいと言ったら、そのガイドさんが自分の生まれ育った地域の識字教室に連れて行ってくれました。土煙が舞うような道を2時間ほど走って、ようやく着いた農村のなかの識字教室です。いつも学んでいるところに行ったら、竹垣で囲われているような風通しのいいところでした。学んでいる場所のすぐ外からは、子どもたちが窓を通して見ている。よその人間が来ているので子どもたちが集まってきていたのです。そこで学んでいる人たちにいろいろ話を聞きました。「識字学級をしていくうえで、いま一番必要なものは」と質問すると、「仕事がほしい」と。それは部落の識字もいっしょです。「文字を勉強しているのも仕事がほしいから」「農業だけでは食っていけない」と言われたのが印象的でした。識字が文

字の読み書きだけでやられている場所はないんだ、と感じました。

これでいったん話を終わって、このあと、やりとりしながら、ひろげていきたいと思えます。質問があったら遠慮なく出してください。

●質疑応答

司会 森先生への質問、感想や、自分の地域の識字の話など、出していただければ。

○外国の識字学級

○○ 外国でも識字学級がたくさんあるということですが、いままであまり聞いたことがありませんでした。お話を聞くと、外国でも識字が増えているようでうれしい。それから、日本のことですが、識字学級は全国的に識字学級という名前ですか。どうですか。

森 まず世界の識字ですが、オーストラリアに 15 年か 20 年ぐらい前に行ったことがあります。メルボルンの駅前に識字センターがあります。ヴィクトリア州立大学の出先の識字センターです。そこでは、識字のニュースを 3 種類発行していました。教材のことや新しいイベントのことなど、種類に分けてニュースレターを出しているということでした。いろんな作品集も紹介してもらいました。

刑務所の中の識字もあります。石川一雄さんの話がありましたが、世界的に言えば、刑務所ではだいたい識字学級が行われています。というのは、小さい頃から勉強する機会がなかった人が、食べるのに困って犯罪を犯すことが多いので、そういう人たちが自分たちに必要なことを学んで社会に出て行く、そのために刑務所が応援するということです。インドネシアに行ったときは、刑務所の中に入れてもらいました。非常に明るい刑務所で、囚人の人がギターを弾いて歌をうたっていたり

していました。そこでも識字学級をやっています。刑務所の中の識字は世界的に行われているし、教育学者にとっても、刑務所の中の識字というのは大きな研究テーマになっています。

メルボルンでは、移民センターというのがあって、いろいろ話を聞きました。20 年ぐらい前で、日本でも外国の人が増えてきた時期です。日本で問題になっていた一つは、子どもの頃に日本に来た人が、日本語は上手になっているが、自分の国のことばがしゃべれなくなる、という問題です。そのことを質問したら、「その問題には 30 年前から取り組んでいます」ということでした。オーストラリアでは、いま日本で議論しているようなことを、それぐらい以前から取り組んできたということです。オーストラリアでは、移民のための英語教室を、図書館や教会、公民館など、いろんなところでやっていました。資料も、この資料はどういう人のための資料なのかということが、すぐわかるように印がついている。そういうのを見ると、日本は、行政の応援ということでは、部落の識字に対してはそれなりにありましたが、全体的にはあまりやっていない国だなと思いました。

全国の識字学級の名称についてですが、これはいろいろです。八尾の西郡では、読み書き教室「いずみの会」。

○○ 識字学級の名称は、住吉では「輪読会」と言っていますが、統一した名称として使われているのは「識字」でしょう。

森 そうですね。教室の名前としては、いろんな名称が使われていますが、統一した名称は「識字学級」です。

いま、識字にかかわる学会をつくろうという話があります。夜間中学が全国に 31 校、そのうち大阪に 11 校ありますが、それを全国の都道府県すべてに少なくとも 1 つ、つくろう

という運動があって、それが実現しそうです。法律も実現しそうです。それもきっかけになって学会をつくろうということになってきています。学会も、大学の教員だけが集まるのではなくて、それぞれの教室で学んでいる人、運営にかかわっている人、コーディネーターの人などが集まれる学会にしようということで、話が進んでいます。

部落の識字では、全国識字経験交流集會もだんだん人数が減っているようです。大阪府・大阪市の経験交流会も昔は1泊でやりましたが、いまはそれほどでもない。しかし、全国的に見れば、いろんな広がりがあります。タイの識字学級で学んでいる人の多くは、隣のビルマから来ている若い人だと言いましたが、識字にあてはまる英語は「リテラシー」ですが、その中に、その人たちの学習も含まれている。日本で言えば、日本語教室も識字の範疇で、世界的にはとらえられているということです。

たとえば、一昨年でしたか、パリに行ったとき、民間で識字センターをやっている団体に行きました。そこは、アフリカから来ている人がたくさん住んでいる地域です。要するに植民地だったところからパリに住むようになった人たちに読み書きを教えるということも、識字という枠組みの中でやっています。世界的に見ても、日本で言えば、日本語の学習をしている人と識字の学習をしている人たちを、まとめて「識字」ととらえるようになっていきます。このこともひらがなで「しきじ」と書く方がイメージにあうのではないかという理由の1つです。

○子どもと親の関係性

〇〇 大人になって識字ということに気づいて勉強することも大事ですが、子どもについては、どう考えておられますか。学校に行っている子どもが、ほんとに学校で勉強についていけるのかどうか、ということが、親の

立場から言えばわからない。親自身が、宿題など子どもが持って帰ってきたものを理解できるか、子どもに教えられているかという、そうではないと思います。特に地域の中は。子どもに「落ち着いて勉強しろ」ということそのものがたいへんなことです。

一般論ではなくて、ほんとうに先生自身が勉強していただいたものを、子どもにこういう形で教えていく、こういう形で親自身もかかわっていけばいいのではないかということをもっと私たちは勉強したいと思います。

森 ちょっと古い話になりますが、先生方の精神がよくわかる話として紹介します。1970年頃に大阪市の依羅^{よさみ}小学校に勤めていた仁田先生という先生がいます。仁田先生は大阪教育大学の卒業生で、部落の小学校などに勤めていましたが、依羅小学校の4年生を担当することになりました。クラスにひらがなの読み書きが十分できない子どもがいることを知って、家庭訪問をして親からいろいろ話を聞くわけです。「うちは小学校に行っていないけれども、1年生の頃から下の子を背負って行って、よく泣くから気にしてた。みんなかわいがってくれるけど、授業中に泣いたりするから、気にしていたら、ある日、やさしい先生が、たいへんやろ、もう学校に来なくていいよ、と言ってくれた」。それでそのおかあさんは、「すごうれしかった」と言う。そのときは、うれしかったけれども、そのせいで、字を学ぶ機会を失って大人になった。

また、その4年生の子が2歳ぐらいの時に、元気がなくなってきて病院に連れて行ったら、医者が「栄養が足りないからポポンエスを飲ませなさい」と言った。おかあさんは薬局でポポンエスを買ってきて、飲ませたけど治らないから、もっと飲ませたら治るかなと思って飲ませたら、今度は顔が黄色くなってきて、ぐったりする。こわくなってまた病院に行ったら、医者が、「なんぼ飲ませたんや、ひとつ

まちがったら死ぬところや」と怒られた。そんな話をしてくれた。そんな苦勞をしながら、ようやくその子どもを育てて 10 歳ぐらいになった。

そのお母さんが「最近あったはなし」として語ってくれたのが、次のようなことです。ある日、おかあさんが仕事から家に帰ったら、その 4 年生の子と下の子の二人が、テレビを見ている。だから、「宿題したのか」と聞いた。そしたら、4 年生の子が、「おかん、この字、見てみ」とテレビに映っている字を指差して、おかあさんに読ませようとする。でもおかあさんは読めない。「おかんかて、読まれへんねやないか。なんでおれが勉強せなあかんねん」と、その子が言う。

それを聞いて仁田先生は、「おかあさんが読み書きできないようになった原因をつくったのも、自分と同じ教員。4 年生の子が読み書きできないようになった、十分勉強できないようになっているのも、自分と同じ教員が 1 年生のときからきっちり見ていないから」と、ものすごく責任を感じて、なんとかしたいという思いから、『ひらがな』という教材をつくりました。これはいま大阪市内でも大阪府内でも、あちこちの学校で使っている教材です。

当時の教科書は、小学校 1 年の教科書には、最初に「あか、あお、きいろ、たかいそら」と、出てくる。仁田先生たちは、これは問題だと発見したというのです。例えば「い」が 2 回出てきますが、この二つの「い」は違う「い」です。「きいろ」の「い」は、「き」の音を伸ばした「い」。しかし、「たかい」の「い」は「か」を伸ばしているのではなく、「い」と発音します。同じ「い」でも違うのです。こういうことを教科書はごちゃごちゃにしている。あ行の字も入っているし、か行の字も入っているし、ら行の「ろ」も入っていて、順番がむちゃくちゃです。ひらがなを教えるとき、一筆で書ける「し」とか「く」から教えるというやり方もありますが、そう

いうものでもない。

しかも、先生はどう教えるかと言えば、「先生が読みますから、あとから読むんですよ」と先生が言って読む。子どもたちは先生が読むとおりに、あとについて言うことができますが、ほんとうに教えたことになっていない。

ところが日本の教育は明治以来、ずっとこれできました。「ススめ、ススめ、ヘイタイ、ススめ」、「サイタ、サイタ、サクラガ、サイタ」と、戦争中の教科書にありますが、結局、文字を一つ一つ読めなくても、音で聞いているだけ。

そういうことを分析して、入門期の言語指導教材集として『ひらがな』をつくった。例えば、鉛筆を持って適当な圧力で書くというのは結構むずかしい。卵を割るのも適当な力を加えて割るのがむずかしい。微妙な力をかけるのはむずかしいことです。『ひらがな』という教材集では、鉛筆を持って書く以前の話として、折り紙をきちんとできるかどうか、体をしなやかに動かし、リズム感をもって体を動かすような遊びができるかどうか、絵描き歌ができるかどうか、といったことを丁寧にやりながら、その子が、小さいときから本来くぐってきたはずのことを、きちんとできるかどうか、小学校に入る前にくぐってきたかどうかを確かめる。そういうことをやっている。すごくいい教材で、いろんなところで使われてきています。

この仁田先生は、おかあさんを識字学級に誘って、識字学級でいっしょに勉強したりしています。こんな話もしていました。さっきの子どもには、小学校に入る前の妹がいる。「おかあちゃん、あの子に絵本読んだり」と言って、夏の暑い日、そのおかあさんと待ち合わせて、本屋にいっしょに行く約束をした。暑いので仁田先生は半ズボンに T シャツで待っていた。暑くてうちわで扇いで待っていたら、向こうの方からちゃんと和服を着こんだ女性が歩いてくる。それがそのおかあさん

だった。「おかあちゃん、すぐそこの本屋に行くだけやのに」。でも、おかあさんにとっては、本屋に行くというのはたいへんなことで、一大決意がある。おかあさんにとって本屋がそれぐらい敷居の高いところやと改めて気付いた。『ひがらな』というのは、そういう、識字で学んでいる人たちの思いも受けとめてつくられた教材です。

こんな話でよかったですか。

〇〇 ちょっと違います。先生の考えを教えてください。

〇〇 Hさんが言うこともよくわかります。でも、森先生は大学の先生やから、小学校のことは、くわしいことはわからない面も多いと思います。Hさんは、いまの子どもたちのことを言うてるのか、昔の子どもたちのことを言うてるのか。

〇〇 両方含めて、考え方がどう変わってきたのか。

〇〇 私はいま小学校の図書室でボランティアをしています。朝は絵本を読んだり、紙芝居をやったり、お話を聞かせたり、しているし、午後からは勉強が終わった子どもたちが図書室へ来て、宿題をしたりして帰ります。それ以外に、現在では、5時まで、両親が働いている子どもたちを預かっているところがありますが、子どもたちはそこに行って宿題をしたりしています。ちょっと昔とは違うと思います。

最近の子どもたちの傾向としては、学校へ行きたくない、という子どもたちもいます。登校拒否の子も4人ほどいます。先生たちに、どうなっているのか、先生たちはわかっているのかと聞いたら、家庭訪問もいきますと。実際、学校へ1日だけ来させるようにした子もいます。私もその子と対応しました。住吉小

学校の場合は、すごく人権教育が進んでいるので、まわりの子どもたちが励ましています。だからその子は1時間か2時間で帰ると言ったのにずっといたんです。よかったなと思うような風景もありました。

親も「宿題をしなさい」とは言いますが、働いていると、そういう声かけも家庭では少なくなかないかなと思います。

うちの息子が1年生のとき、帰って来て「こんなしんどい宿題しらんわ」と言いました。「1から100までの数字をずっと書きなさい」という宿題でした。「もういらん」と言うて、しないので、先生、その宿題、あんただけに出したんか。ちがうやろ。クラスの子、みんなそのしんどい宿題、やってんねで。あんた、でけへんのか」と言ったんです。「おかあさん、横で見といたるから、やってみ」と、私は子どもにつきあって、勉強を見てました。子どもはしぶしぶ宿題をしました。そういうふうに、家庭の協力も大事ですが、昔は、部落の親自身もできないから、どうしていいかわからへん。いまの親はだいたい学校も義務教育は終わっているから、それぐらいの声かけはできるはずですが、でも、それも怠っている親がいると、子どもはしんどい思いをしていると思います。しんどいこともさせんとあかん、それをさせてない親も多いのではないかなと思います。

〇〇 今の話で分かりました。

OPISA 調査結果から

司会 これからの識字はどうなるのかと悩んでいます。教室が減ってきたりするし、いまの時代でも、読み書きが苦手な若い人も増えてきています。うちの地域にもいます。そういう方にとっての識字は、もう一回、学び直しの場合にもなるのではないかな。実際、そうなっている部分もあると思います。いまの識字、これからの識字について、みなさんの意

見、森さんの考え方を聞きたいと思っています。

森 PISA2009 の調査結果があります。OECD という国際機関が PISA という調査を実施して、世界の国の子どもたちの習熟度の比較をやっています。中学校 3 年の読解力の習熟度レベルで、レベル 1 以下が日本は 13.6%。レベル 1 以下というのは、基準に達していないということです。日本の中学 3 年生は、韓国（レベル 1 以下 5.8%）、フィンランド（8.1%）、香港（8.3%）と比べても、レベル 1 以下が多い。読解力というのは、リーディングリテラシー。同じようなことをもうちょっと領域を広げて調べると、数学的リテラシー、科学的リテラシーも日本の子どもはレベル 1 以下が多い。読解力のレベル 1 は 2006 年の調査では 18.4%、2009 年調査では 13.6%と減ってはいますが、他の国に比べると多い。日本より多いのは、格差が大きいイギリスやアメリカです。アメリカには識字の法律があって、法律の最初に、アメリカでは 3000 万人が読み書きに困っていると書いています。アメリカの人口が約 3 億人なので 10% ぐらい。アメリカは 17.7%がレベル 1 以下で 3000 万人ということは、日本で言えば、日本の 1 割は 1000 万人。1000 万人までいなくても、日本で読み書きに困っている人は 500 万人よりも多いと推測されます。

OECD は、子どもだけではなく、大人の読み書き能力の調査を 2011 年から 2012 年にかけて国際的にやっています。24 の国と地域が参加した経済協力開発機構（OECD）の調査ですが、日本は OECD 平均と比べると高い。レベル 4 の人は OECD 平均 11.1%に対して日本は 21.4%です。去年、この調査結果が出たときに、日本の新聞は「日本は世界一、大人の読み書き能力が高い」と報道しました。この調査結果のレベル 1 とレベル 1 未満を見ると、OECD のレベル 1 が 12.2%に対して日本

は 4.3%と、確かに少ない。レベル 1 未満の人でも OECD3.3%に対して日本は 0.6%と少ない。確かに少ないのですが、合わせて 4.9%。つまり、約 5%がレベル 1 以下。20 人に 1 人です。日本でも 20 人に 1 人、つまり約 500 万人の人たちは読み書きが十分できないということになります。だから、部落だけではないのです。（ただし、この調査には日本在住の外国人は入っていません。他の国では外国人が入っています。諸外国の結果は、外国人を含まない形にしていたら、もっと読み書き能力が高い結果になったはず。逆に、日本の調査で外国人が含まれていたとしたら、レベル 1 以下の人はもっと多くなっただろうと考えられます。）

○国際的な識字の取り組み

○○ 住吉でも識字を始めて 48 年ぐらいになります。ずいぶん変わってきました。外国の方、障害者の方、一般の方、なごやかに勉強させてもらっています。国際識字年は 10 年かかって、世界の非識字者をなくするという運動でしたが、識字年をもっと延長してください、と訴えたということを知ったのですが、その後、どうなったか教えてほしい。

森 それは、東大阪の夜間中学の生徒さんがパリまで行って訴えました。私もいっしょに行きました。ユネスコで識字の担当をしている人は、インドかバングラデシュの人でしたが、その人にみんなの作ったリボンやメッセージを届けて、もう 10 年、国際識字の 10 年を延長してもらえませんかと言いましたら、「10 年伸ばすという考えはないが、けれども識字の 10 年でやってきたことは続けるつもりですので見ていてください」と言われました。

これまでの取り組みで、取り組みが進んだ国もあれば、あまり変わっていない国もあります。しかし、そういう国でもやっている人たちはやっていて、だいぶ進んではいるよう

です。特に進んだのはインドと中国だと、国際的な会議の場で言われています。インドでも貧しい層の人たちが、学校や大人の教室でどんどん広げていて、変わってきている、と言っています。

〇〇 10年ぐらいではあまり変わらない……。

森 いや、結構変わったけれども、一方で、変わっていないところも多いという感じです。日本はあまり変わっていない。調査もしていない。さっきオーストラリアの紹介をしましたが、オーストラリアは1990年ごろに全国調査をしました。移民は含まず、オーストラリアで生まれ育った人に調査をしたら、10人に1人は読み書きに困っているという結果でした。フランスも同じ頃に全国調査をしたら、5人に1人は読み書きに困っている。ヨーロッパ、アメリカも含めて調査をして、その調査を通じて、こんなに読み書きに困っている人がいるということを「発見」して、それで政策をたて、法律をつくってきています。ところが日本は読み書きできない人はいない、と言い続けて現在に至っているので、これはたいへんです。識字・日本語連絡会としては、法律をつくってきっちりやってくれという運動を進めています。

〇〇 住吉でも識字年のときに実態調査をしました。まったく書けない、ひらがなは読めるが漢字が書けないとか、なんらかの形で、読み書きに不自由している人が4人に1人いました。20年前です。いまは把握できてません。

〇若い世代と識字

森 さきほどの紹介した PISA の調査結果は中学3年生ですが、読み書きが十分できない子がけっこういる。ひらがな・カタカナは書けるでしょうが、生活では困っているのでは

ないかと思います。わたしの住んでいる地域で高校生に話を聞いたときも、「難波に行くのはたいへんやから行けへん」と言っている子がいました。都心に遊びに行く子は少ない。車の免許を取って郊外型の遊びをする子が多い。生活に必要なスキル・力という面で、課題があるのではないかと思います。ところがその子らにとっては、「ひらがなもカタカナも書けるし、漢字もそこそこいける。だから識字やないねん」ということになりやすい。この子たちが、どうすれば識字学級に来るのか、あるいは識字学級とは別の形になるのか。ちなみに、わたしの住んでいる地域では識字学級は識字学級のまま、それとは別に、近所のムラの外の団地に住んでいる中国帰国の人には、別の日本語教室をつくっています。人権コミュニティセンターで教室を開いて、日本語教室と識字学級とを別立てでやるようになっています。

若い人がいまの識字学級に入ってくるというやり方もありますが、もう一つ、別の形の教室をつくって、精神としては識字学級の精神でやる、というように進めていくというやり方もあると思っています。地域によっても、教室のあり方によっても違うと思います。

〇人間を取り戻す識字運動

〇〇 九州の全国婦人集会に参加した人が田川の識字学級のことを聞いて、住吉の識字ができました。その頃は、「奪われた字を奪い返す」と言っていました。なぜかと言うと、義務教育すら行けなかったから。戦争と、それから私の場合は、おとうさんが死んだから学校に行けなかった。それぞれ事情があって、当時はたくさん識字に来ていましたが、いま残っているのは私と木本さんぐらいです。みんな亡くなって。文集が9冊あります。いまは一般（部落外）の人も来ています。日本語教室とは別です。

夜はたいへんなので、私ら水曜組や土曜組

はお昼です。女性部の人の家に、私はプリントを配ってました。

いまはだんだん識字が薄れて、いままでがんばってやっていた人が亡くなっているし、私も 80 歳でいつまで続くかな、と思ってます。でも、中学 3 年の卒業の証書はもらえなくても、身につけることを大事に、私はいまがんばっています。

「識字と人権のまちづくり」と言うけど、識字で勉強しながら、人権をわかり、まちをつくってきた。私らにとっては、識字をやりながら、ヘルパーの仕事もし、人権を大事にしてきました。

識字の行きはじめは、子どもを横においといて行ったんです。そんな時代を乗り越えて、いまはほんまに、一生懸命、毎日自分が生きていくために、識字学級でがんばってきた。死ぬまでがんばらなあかんのとちがうか、部落解放運動を続けていこうと思ったら、識字でがんばっていかなあかんのとちがうかなと、私はこの頃つくづく思ってます。

〇〇 いま K さんが言ったように、識字、「字を識る」ということは、人間を取り戻す、生活を取り戻すこと、だから一生、勉強。住田利雄も教育は一生と言っていました。字を識ることで世間が変わってくる。いまでもそう考えていて、住吉の識字はすごいなとも私思います。

プリントを配ってたという話がありましたが、なんで通信制を始めたかといういきさつですが、大川恵美子さんです。識字学級を始めようと言ったのも、大川さんが 1966 年（昭和 41）に九州へ行って、田川の識字をこちらへ持って帰って来た。住田館長に話をして、やろうやないかと。そのときの講師が吉田さんでした。彼女も結婚して子どもを産み、ということで、私に代わったんですが、大川さんが、「字を習いに来れない人がいる。その人たちのために、識字学級に来なくても、家

で書けるようにプリントをつくろう」と。小学校や中学校に行っている子どもがいれば、その子どもたちが親をバカにするのではなく、「おばあちゃん、これ、わからへんねん」とか「おかあちゃん、これ、わからへんから教えてな」と言える環境を、家で作ろうということで、「小さい先生」という形でやったんです。そのプリントを K さんがずっと作ってくれていました。

そういう点で、住吉では、大川さんのやってきてくれたことも、K さんのことも、いまでもそのことが生きていると思います。

〇〇 いま識字学級をがんばって続けているのは、中学校を卒業しても漢字が書けない子どもがたくさんいます。そのためにも識字学級を残していきたい。死ぬまでがんばりたいと思います。

〇〇 少しずつ状況が変わるのに対してどういように対応していくかということがあります。いままでの識字学級というなかでの対応のしかたもあると思いますが、それ以外の取り組みということがあれば。

〇これからの取り組み

森 箕面の北芝では夜間学校というのを始めています。週に 4 日ぐらい、夜に教室をやっている。7時から8時は中学校で学ぶような中身、8時から9時は大学で学ぶような中身ということでやっていて、30人ほど集まっています。若い人だけではなく、13歳から50代まで集まっていて、当初の目論みとはちがう層の人が集まっていますが、30人集まっているというのは意味があるということで、いま試しにやっていますが、来年度は本格的にやろうと計画しています。

若い人たちにアプローチするということに、「識字学級に来て」という言い方と、ちょっとちがうやりかたでやるということがありま

す。昔、「ラッタッタ」というバイクがありました。オートバイを女の人に売り込もうとしたけれども、なかなか売れない。調査をしたら、オートバイは男の乗り物だ、オートバイに乗るのは女ではないという意識があったので、なかなか売れないということがわかった。だから、オートバイにも女の人が乗る時代が来たということで、イタリアの女優のソフィアローレンにファッションナブルな服やヘルメットを着てもらって、「ラッタッタ」の commercials をやった。これがきっかけで女の人にバイクが普及していった。識字もいっしょで、いまのところ、「おばあちゃんの行くところや」と勝手に思われているけれども、何かをちょっと変えたら、そうやないで、ということ伝えることができるのではないか。

ただ、その「何か」というのが、まだわからないところがあります。そこでわれわれが考えたのが、「識字」をひらがなの「しきじ」にしたらどうか、ということですが、何かをちょっと変えたら、「すごくええ」と思ってもらえる要素は十分あると思っています。

一方で、若い人向けの教室をつくるという面と、もう一方で、識字の精神を生かす。そこに来てくれる中学生・高校生は絶対にいると思う。いま、大阪市内でもフリールームというのがあって、不登校の子、学校に行きたくない子に集まってもらっている。大阪市教育委員会は、「勉強してくれないとここに来た意味がない」と言うけれども、担当している人は、「いきなり勉強などできるものではない」と言う。ここは私の居場所だと思ってもらえなかったら、前には進まない。逆に、一度居場所やと思ってもらえたら、どんどん前に進む、もともとみんな力は持っているから、どんどん前に進む。そういうことと、うまくつながるようなことをしていけば、「識字の雰囲気が好きや」という子も出てくると思う。それぞれの地域で、いろんなことをやってみて、出し合ってみるのも大事やないかなと

思っています。

もう一言だけ言いますが、いま企んでいることがいろいろあって、一つは、大阪市内は来年3月で、市民交流センターが閉鎖されるという状況なので、識字にかかわる資料がどこへいくのか、ということが心配です。それで協力してもらって、資料を一つのところに集めて保存する、ということをやろうと思っています。保存した資料を活用して、歴史を整理し、識字は何を大切にしてきたのか、ということ、形として残す、ということです。

それから、いま語ってくれたような思いや、自分の生い立ちなどをビデオなどで残して保管する。保管するだけではなくて、そこに入っているものをもとにして、これからの識字や、これからの若い人たちの識字にあてはまるような学習とかを、どんなふうやっていけばいいのかという作戦を立てる、ということを企んでいます。これからも協力していただけるとありがたいと思っています。

司会 森さんは、資料を集めたり、ビデオなどで生の声を映像で残したいという動きを、これからつくっていくと思いますので、森さんから協力を願いますと言われたときは、受けていただけたらと思います。

まだまだ質問したいことや発言したいことがあるとは思いますが、予定していた時間になりました。森先生、本日はありがとうございました。皆様でお礼の拍手を送りたいと思います。(拍手)

公益財団からのお知らせ

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の動き

2015 年度事業計画・予算を承認されました

さる、3月6日(金)市民交流センターすみよし北において午後2時から3月理事会が、



3月21日(土)2時から3月臨時評議員会がそれぞれ開かれました。今回の理事会、評議員会では、2015年4月からの公益財団としての独自事業の取り組みと市民交流センターすみよし北に関する取り組みについて、それぞれ①事業計画に関する件、②予算に関する件が提案され、承認されました。

それ以外の報告と提案事項としては③人事賃金委員会からの退職された職員の後任人事と2015年度の職員等の賃金に関する件、④大阪府法務課との協議での2016年4月1日、定款変更認定までの流れについて、⑤1919年に建設された青年湯以来の共同浴場が果たしてきた役割、さらに1960年に建てた年度の住吉隣保館以降解放会館、人権文化センター等が果たしてきた役割を受け継いだ隣接地区住民の福祉と人権を守っていく拠点としての役割を果たせる「新センター」建設の基本設計、工程表についての提案と議論が行われました。この「新センター」は住民の自主活動の拠点、相談の拠点、自立支援の拠点、交流の拠点、人権問題や住吉地区に関する図書・資料の拠点としての機能を持ったセンターにしていくことが提案され承認されました。

提案事項に関しては特に⑤の「新センター」の建設に関する質問、意見が活発に出され、今後についてはより多くの方々に建設にむけた意義と目的を訴え、みんなの力で「新セン

ター」を建設するための寄付金をお願いしていくことが確認されました。

公益財団へのご寄付へのお礼

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の活動は、皆様方からのご寄付によって支えられています。2015年3月以降、以下の団体からご寄付を頂いています。この紙面をお借りしてお礼申し上げます。

- ・株式会社 大殖 金額200万円
- ・株式会社 山川物産 金額200万円

尚、株式会社 大殖、並びに株式会社 山川物産からのご希望で寄付目的に関しましては、財団の新センター建設にむけて使用するようご依頼されていますのでその趣旨に沿って使用させていただきます。

【お願い】

引き続き、皆様のご寄付をお願いいたします。尚、ご寄付を頂きました方には免税の制度があります。詳しくは、財団事務局までお問い合わせください。
電話:06-6674-3732

ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>

*2014年度から「すみりんニュース」は、2ヶ月に1回、奇数月に発行致します。